
小さなおきつねさま。

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さなおきつねさま。

【Nコード】

N84740

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

ある日の香霖堂。この日来店した藍は、店主・霖之助に唐突に質問をぶつける。なんでも橙の誕生日を祝いたいらしいが……？

（前書き）

この小説は森近霖之助×八雲藍のカップリング小説です。カップリングがアウトな方にはおすすり出来ません。その点をご了承ください。

余談ですが、このネタはツイッターの香霖堂bot（<http://twitter.com/kourindoubot>）の「おきつねさまストラップ」のくだりからアイデアを頂きました。bot製作者の苺様、もとい口上担当の道草様に最大級の感謝を。ありがとうございます。

例の如くぐだぐだした展開ですが、どうぞ。

「あのう、霖之助さんは…その、誕生日なぞ祝うことがあるんでしょうか？」

大きな尻尾ごと縮こまるようにひかえめな口調で、九尾の妖怪少女・八雲 藍は言った。

その唐突な問いに、霖之助は少なからず興味を惹かれ、本から顔をあげるなり問い返した。

『小さなおきつねさま。』

「まあ、祝わないということもないが、どうしたんだい？」

「いえ、そこまで深刻な話である訳でもないんですが…」

正直霖之助は自分の誕生日を祝うことなぞは、そこまで気にしてやるものではなかった。「そういえば今日誕生日だったか」くらいの感想を持って終わるのがほとんどである。

たまにそれを口実にして酒を煽り、深酒をするような日もあったが。そんなに飲める口でないのにその日に限って無理をするため、ひどいことになってやめた。人は学習する生き物だ。うむ。

しかし考えてみれば、ふと至極当然の疑問が生まれた。

「というか、君はどうなのだい？ 妖怪は寿命が長い、己の生まれ
た日を年一回祝うなど、おつくうでしないのではないか？」

誕生日をもっとも盛大に祝うのは人間である、半人半妖である霖
之助になると既に誕生日の感覚はほとんど無いと言っている。

理由は、寿命が長いからだ。生きている時間が余りに長いからこ
そ。誕生日という一年に一回巡ってるものが物珍しくなくなる。つ
まりは記念日としての意味を失うと言うわけだ。

霖之助よりもさらに寿命が長く、途方も無い時間の中に生きてい
る妖怪などはその典型であろう。

すると彼女は、困ったように苦笑しながら、

「ええ、確かにそうなんですが……」

と歯切れの悪い答えをした。多少、言ってもいいものかと諮詢し
ている風がある。

「君にしてはずいぶんはつきりしない物言いだね」

藍は平常まじめできっちりの性格をしている。

ぶれた物言いを忌み、その思考は理詰めで合理的。

その藍が言葉に詰まると言うのは、なかなか珍しいことだった。
少し待っていると、ためらいながらも切り出してきた。

「いえ、なんといいですか、その、橙の誕生日をどうしようかと
思ってます……」

あはは、と頭をかくしぐさをしながら藍は言った。ちょっとはに
かんだその表情は、橙のことを考えて出る笑みなのだろうか。いや、
妖怪なのに自分の式の誕生日を祝おう、などという親馬鹿なところ
を告白する恥ずかしさなのか。

橙は、藍の式である。まだ式になって日が浅く（ただし、妖怪基
準でだが）、一人前の式とは言い難かった。それ故に、主人である
藍はいろいろ世話を焼きたくなるのだらう。まあ誕生日を祝いたい
と言いつつ、もうなすけものだ。

「ふむ、どうしよう。と言うと、どのように祝おうか、というこ

とか」

霖之助はひとまず、その質問に対して的確に答えるために思考を飛ばした。

思い当たる言葉を数珠繋ぎに出し、それを文章の決まりに従い並べなおし、記憶から言葉にする作業を行う。

「まあ一般的には、里の人間たちがやるように。子供を囲んでごちそうを並べ、家族で祝ってやるというのが常道だろうね。あとは、贈り物かな」

やはり誕生日を祝うのは、人間の慣習である。ここは人間の例を参考にするのがいいだろう。

まあ、どこかに自分の誕生日を祝い続けているくせに、途方も無い時間を生きている数奇な妖怪がいたらまたそれはそれで別の話だろうが。なんとなく、いそうだから怖い。

藍の方は、あらかじめその答えが返ってくることを予見していたらしい。すぐに答えが返ってきた。

「はい、問題はそこなんですよ」

しかしにこやかに、彼女は言う

「なにか問題があるのかい？」

すると彼女は、恥ずかしい話なんですけどね、と断ってから。

「橙は…何をもらったら喜んでくれるでしょうか…」

深刻そうにつぶやいた。

何のことは無い、贈り物について悩んでいたのだ。

ふむ、贈り物か。霖之助はひとまず橙について想像し、そこから連想されるものをひっぱり出してみることにした。とはいえ、霖之助の中で橙の予備知識といえば、猫の怪であるということと、マヨヒガで猫の里を作ろうとして難航していること、あとは水が苦手だということくらいなのだが。

そうして出てきた言葉を矢継ぎ早に提案していく。

議題がどうであれ、思いついたことをひたすら言っていくという

作業は問題の解決に有効である、と外の世界の本にあった。確かこの手法を、ブレインなんとかと言ったろうか。

「魚などは？」

「食べたらなくなってしまうものを贈るのは…」

「マヨヒガでの橙の権力を増してやるとか」

「それは橙自身が努力してやって欲しいです」

「マタタビなどは？」

「そのへんに生えてるものじゃないですか」

「君たちにとっては嗜好品じゃないのかい？」

「私も同列ですか、橙はそうかもしれませんが違います。というかちゃんと考えてますか霖之助さん」

おつといかん、一つの話題に固執するのは確かいけないのだった。と霖之助が思ったところで藍が釘を刺した。確かに大した提案をしてないので、そう言われても仕方が無いといえば仕方が無い。

まあいい、外の世界のやり方が全て正しいとも限らない。それも急に使おうとすれば、失敗するのは道理だ。

ひとまず何でもかんでも言うのは止め。多少言葉を選び、本命の提案をする。

後から考えると、やっぱりこれを最初に言うべきだったような気がする。

「そうだな…あとは、縫い包み、などどうだろう？」

「ぬいぐるみ？」

案の定、藍は食いついた。

「そう、例えば。彼女の好きなものをかたどった縫い包みを贈るとか。好きなものの形だから自然と好意がわくだろうし、気に入って持ち歩いてくれるようになってくれれば君もうれしいだろう？」

はい、とうなずく藍にさらに解説を付ける。

「それに縫い包みとは人形に通ずるもので、何かをかたどった物、

すなわち化身の意味がある。己の分身、という意味だね。己の分身たる縫い包みを贈るということは、かの人をいつでも見守っていますよという意味を持つし、己の分身を他人に預けるわけなのだからそれくらいあなたを信頼していますよという意味表示。つまりは物と信頼を同時に贈ることができると言う訳さ」

藍はうんうんとうなずき、

「なるほど、下手をすると縫い包み、もとい人形は呪術にも使えますからね。本来他人に預けると危険なものです」

と納得した風で言った。

人形で呪術、と聞いて某人形使いを思い出した霖之助であったが、黙っていた。いやなんで思い出したのかは知らない。本当に知らない。

「その通り、つまりそれは裏返しで信頼と愛があると言うわけさ」
藍は、ぬいぐるみ、かぁ。と思考に浸っているふうであった。

考え込む時の藍は、はたから見ると眼光鋭く近寄りがたい印象だが。見慣れてくるとその印象も変わってくる。考えに集中するからだろうが、しつぽがゆらゆらと揺れたり、かと思うと急にぴっと立ったりする。人間でいう貧乏ゆすりのようなものが、尻尾に出るのだろうか。見ていて非常に面白い。

なんとなしにその微細な動きを見せる尻尾を眺めていると、そのふわふわした尻尾に触れなくなる。なんというかこう、ネコじゃらしをちらつかされるネコの感じが良く分かる気がする。

眺めているうち、猛烈にそのふわふわを触りたくなってくる。なんというか、これはいけない気がする、すぐく触りたくなる動きと質感をしている。そうして霖之助が尻尾に手を伸ばそうかと思った矢先。唐突に藍が顔を上げた。

「あの、これはほんの余談なんですが…」

そう言いかけた藍の目は、どこか虚空をつかむように伸びた霖之助の手を見た。

慌てて手をひっこめた霖之助は、務めて冷静に質問を促した。危

ない危ない。

「なんだい？」

藍の方も、不審に伸びた手の方にはあまり関心はいかなかったよ
うで、何も問いただすことはしなかった。良かった。

しかし、本当にしようと思っていたはずの質問の方は、なぜかま
た言葉に詰まるように、少ししどろもどろの口調であった。

「霖之助さんは…その、人形とか。もらって、うれしいですか…
？」

区切り区切りの単語を、少し頬を赤らめながら聞いてくる。

どうしたんだろう、何か恥ずかしいこと言ってる訳ではないのに。
そう思ったが、ひとまず霖之助は質問に答えた。

「うれしいか、と聞かれればうれしいよ。まあ、相手にもよるだ
ろうけど。あまり好かない相手に人形を贈られても、扱いに困って
しまうからね」

当然のように霖之助は答えた。藍の方も普通に聞いているようだ
ったが、どことなくいつもより肩に力が入っているように見えた。

「そう、ですか」

藍の耳がぴくり、と動いた。

それからしばらく藍は店に来なくなった。

まあもとから忙しい上に、主人の紫が来る時は気を使うからなの
か来店しなかったりと言うこともあったし、そうこない日も珍しく
は無かったのでそう気にしなかった

いやきつと、橙の誕生日を祝うための準備で忙しいのだろう。

ただ、橙の誕生日が無事に祝えていればいい。と、そう願ってい
た。

そうしてまた幾日が過ぎ。

九尾の少女が再び香霖堂の来店ベルを鳴らした。

「いらつしゃい。おや、藍だったか」

ふとベルの鳴る方を見てみれば、見慣れた中国風の衣装。ふわふわしたしっぽ。

「ごきげんよう霖之助さん、そしてお久しぶり」

柔らかな笑顔で入店する藍がいた。

しかしどこかその静かな笑みを浮かべる頬は、なぜかすこし赤いような気がした。

「ずいぶんご無沙汰だったが、橙の誕生日はどうだったんだい？」

「ええ、ぬいぐるみを贈ってあげたら。すぐ喜んでくれました、持ち歩ける大きさに作ったので『いつも持ち歩きます！』なんてうれしいこと言ってくれましたよ」

すぐくつれしそうに藍は語った。その光景を想像すると、なんとほほえましい親子愛なことか。

それにしてもやはり藍の事だから、手作りでぬいぐるみを作ったのか。数学の得意な藍の事だ、大きさまできっちり計算して作ったのだろう。

「そうか、それは良かった。それにしても、一体何をかたどった人形をあげたんだい？」

「聞きたいですか？」

「うむ、興味はあるが」

その質問が来ると予想していたのか、藍の返答はスムーズであった。

少しうつむきながら、どこかに準備していたらしいそれを取り出した。

「実はですね…、今日霖之助さんにも贈り物があるんです」

後ろ手に、懷から取り出したそれを持ちながら。藍は言った。

につこりと笑いながら、しかし上げた顔は真っ赤であった。

後ろに回していた手を、ゆっくりと霖之助へ差し出す。

「これ…、です」

藍が差し出したのは。小さな小さなぬいぐるみ。
手の平サイズの、実に可愛い藍の人形だった。

「これを…くれるのかい、僕に」

「あ、はい。…ええと、迷惑だったら、その、す、捨てても…」

そう言えば前に言っただろうか。好かない相手に人形を贈られても困る、とか。

「……そんなことしないよ、ありがとう」

「――」

藍は何か言いたそうに口をぱくぱくさせていたが、とうとう何を言おうとしていたのかわからなかった。

普段冷静な彼女でも、こんな姿になることもあるものなのか。
真っ赤になっている藍をしり目に。霖之助はこう言い放った。

「いい人形だね、いつも持ち歩くことにするよ」

小さなおきつねさまも、赤くなった気がした。

（後書き）

その日以来、香霖堂はいつもお狐様に見守られることとなったのでした。きつと商売繁盛ですね）

例の如く終わり方が中途半端で終わってるんだが終わってないんだかなオチですが。落ちてます。落ちてるんです。

言い訳はきつと活動報告ですとしますので、お暇な方はどうぞ！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8474o/>

小さなおきつねさま。

2010年11月11日17時27分発行